

# 親鸞の人権思想

藤井勝之

(親鸞との出会い)

全くの素人ですが、親鸞との出会いということで、私の生い立ちという部分も含めて話していきたいと思いません。

私は、本郷の出身で十人兄弟の九番目として生まれました。両親の生きることのたくましさを感じていて、私にはありません。もちろん百姓だったので食べるものはあったらと思うのですが現金収入がない、そういう家庭でした。部落差別という言葉も、同和教育というものも学校であったわけではありません。我々が語らずとも判ったことは、我が家には金がないということでした。親に金銭的に負担がかけられないという事で我々は暗黙

の了解のごとくに我慢し、我慢というより、うちは無理なんだというような気持ちを持っていた。中学を出て、竹原市にある訓練所に行き、そこで溶接技術の学習を一年やり、福山の方へ就職しました。そして、一年間会社で仕事に慣れた所で、誠之館高校の定時制に四年間通った、というような生い立ちです。

そして、神辺の地へ養子として入ったわけですが、私の両親は仏さまを粗末にする家ではございませんでしたが、さりとてそのことを私達に語り聞かせてくれるような親でもない。しかし、私が二十四才で来た神辺の家の祖父は目が不自由で寝たり起きたりという状態でしたが、見えないながらも手探りで近所へ出て、一生懸命、法話をしておりました。いまでも我家には、「おじいさんの説教」というテープもあります。近所の人を集めて法話

をするというようなことをやっておいたらしゅうごさい  
ます。おじいさんは若い時から親鸞、仏教が好きで仕事  
も余りせず、ただただそういう事ばかりやっていた。俗  
に言う、同行さんという形で石松同行さんということ  
で有名だったそうです。そういうことからお年寄り  
はしゅちゅう集まって『正信偈』をあげたりして、お茶  
を飲んで帰るという習慣があります。最近では中身が薄れ  
て、集まっては嫁の悪口を言ったり隣り近所のことを  
言ったりするような場になり下がっているようです。

そういう意味では、おじいさんという人は、ずいぶん  
立派なことをしていたんだなということを感じておりま  
す。その時はよく自身、余り宗教という問題に関心もな  
く、ただ定時制を卒業して夜がものすごく長くなってし  
まったということがあり、当時は随分、本を読みまし  
た。いろいろ読む中で親鸞の本にも触れたこともありまし  
たが、まだピンとこないような状況でした。その祖父もな  
くなり、その後、父が突然に亡くなりました。

それにともない我が家で頻繁にお座をするようになり  
まして、お経本を読みながらやったけれどもわからない  
とうとう『正信偈』のテープを買ってきて一週間ばかり  
練習しました。そのうちにこのお経本にいったいなにが  
書いてあるんだろうか、という疑問がおきました。それ

までにも『歎異抄』なんかも読んだことがあるんですが、  
はつきり言って何も判らなかつた。

そのうち『正信偈』の解説文なんかも読み進んでいく  
うちに、これはすごいことを書いてあるな、ということ  
に気付きました。勿論、小森先生の親鸞の本なども読み  
ながら『歎異抄』を読む。そうするうちに、今まで全く  
感じることも出来なかつた意味も判らなかつたものが、  
ぼんやりとですがこういうことなのかということが判り  
だしてきた。嬉々として読みました。

『無量寿経』の解説本とか四十八願の解説本であると  
かいうのを読んでいった。仏教を信ずるというよりも、  
私には哲学のようなものです。

『歎異抄』を枕元に置いておくのですが、読むたびに  
新しい発見がある。

「弥陀の誓願不思議にたすけられ参らせて、往生を  
ばとぐるなりと信じて念仏申さんと思いたつ心の起こ  
る時、すなはち、撰取不捨の利益にあずけしめ給ふな  
り」

という文章がありますが、はじめは何のことかわかりま  
せんでしたが、まさに他力本願である。ただ念仏とい  
われる意味が以前は判らなかつた。お念仏というのは  
自分が唱えるものだと思っていた。しかし、お念仏とは、

いただくものであると。僕としては、本当に感動ものでしたね。現生不退という言葉なども、我々の今、生きている運動の中に、どうやってこれらを生かしていくかということ。そういう感じでの読み方というものに、だんだん興味を持つようになりました。

（生き方の指針として）

そのような中から、自分の生きざまということを考えていくのですが、宗祖親鸞の思いの中には、己れというものを深く深く見つめる中で、他力に生きるということを抑んでいかれたことに、ものすごく引かれるものがありました。祖父は、きれいな親鸞を語っていましたが、私も、私は生きた泥臭い、あるいは流罪中でのあの人の生きざまを映画などでみて人間親鸞というものを感じました。そういうことで、自分というものを深くみるという習慣というものができたように思います。

子供と私の関係で言うと、非常に悩ませてくれた子でした。親の言うことは聞かない、勉強はしない、先生の言うことも聞かない。ずっと私は悩んでいたのですが、ある時フツと気付いたんですが、これは親の我儘だったんだなということを感じました。深く考えて見れば、親

として私は自分が楽な方向へむけて、子供に押しつけていた自分を見たのです。「歎異抄」を読んでいるうちに、フツと頭の中にそれが思いついた訳です。

それ以来、私は子供にああしろこうしろということをするべく少なくてきました。子供は嘘ばかり言っていますが、人間は必ず嘘を言ったときには良心が咎めるものです。「自分は親に嘘を言った」と。それを私は信じました訳です。我々でも嘘を言うと良心が咎めます。息子が嘘を言ってもああそうか、と言ってやる。心が傷ついているところへ「嘘をいうな」、と突っ込んでいくことは、かえってマイナスだと思う。しかし、相談があればいつでも受けてやるぞという体制だけはとってやるんです。不思議なもので見違える位に変わりました。

こういうのを私自身体験して、「救われる」というのはこういう事かなあ、と思いましたがね。自分だけ楽な方向へ向けて、子供にはしんどい部分を押しつけている自分を見たときに、これがいけないんだ。子供が苦しんでいるときに一緒に悩めばいいではないか。その苦しみから逃げねばいい、逃げてはいけんという気持ちになった。そうするとたいへん楽になりました。

親が苦しむのはあたりまえじゃ。子供も苦しいんじゃない、という気持ちになったら、そこから逃げようとい

う気持ちにならん。もう、とっぷり漬かりゃあええわぁという気持ちになる。これが「救われた」という気持ちになる。自分を深く深く見ると、自分自身の我儘が見えてきたという訳です。

### (解放運動との関わり)

こういったことが、私は解放運動をやっている中で、差別者をも許せるといったらおかしいんですが、部落差別をする気はなかったのに、うっかりそういった話をしましたという事例があった場合。私は私なりに在日朝鮮の人たちのことを、その気はないのにかつに我々は差別してしまった、というようないことがあるだろうと思うのです。そういう形で置き換えて見ることが出来るようになりました。そうすると糾弾会に臨んでも「わしもそうだったなあ」という思いを持ちながら、そこから何を学ぼうか、というようなそんな気持ちになりました。自分自身が変わっていかない、他人を変えていくことはまず無理と。しかし、自分がきちっとしないと他人には言えないのか、ということではないんだと私は思うんですけれども、より一層、啓発する力というか相手を説得し理解をしていただくようにすると、自分自身がど

のように変わったかという姿を見せながらでないことや効果があがらないというふうな思いをしています。これを言うと藤井さんは融和的だと言われていたんです。自らが自らを厳しくせんといけんと言うのがどうして融和的なのかと言っていたんですが。今でもこの考え方を変えてはいません。被差別の立場だからといって、何も「四百年の差別をどうしてくれるんか」とすぐ言う人がいるが、あくまでも今からの出発をどうするんか、という点で話し合いを持っていくようにする。そういう意味で差別を余儀なくされた、あるいは気付かないうちに差別をしてしまった、という時には我々もそうであろう、という気持ちを持ちながら、糾弾会をはじめすべての運動に参加してきます。

### (他力に生きることの難しさですばらしさ)

そんな中で「他力に生きる難しさ」という、自分というものを殺すというか頂いた念仏ということを言いましたけれども、絶対他力というものは、いったいどういうものなのかということを考える時に己れをむなくするという事ではないかと思えます。自分の考え方で凝り固まって、びっしりと鎧を着て人との話に出たら、人の話

が全然、受け付けられんのです。

自分をいったんゼロにして話し合いをすれば、人の話がよく入ってくる。そうした中で、じっくり考えていけばよいという気持ちになるわけです。

他力本願と言いますが、禅なんかで「無」とか「空」とか言いますが、そう言ったものに似たものがあるんじゃないかなと思うのです。

そういうふう生きることは難しいけれども、そうすれば日々が新しいし、謙虚に生きれるんじゃないか。他力に生きるということを私はそのように置き換えて考えているのですが。そうすることによって、じっくりと自分を見つめ直すことが出来るんじゃないかなと思うのです。自分の本性というものは変えることは出来ません。しかし、人間ですら出来るだけ努力をすることによって押さえていくことが出来る。そういった努力を続けなければならんと思っっているわけです。

#### (悪人正機説と宗祖の思い)

悪人正機ということに仏教的意味があるし、もっと深い意味があるというのは承知しております。しかし、私は、宗祖の一生のあの苦しい苦しい生活、生きるか死ぬ

かのギリギリの中での生きざまを通してこそ、宗祖が実感されたと思うのです。お経に書かれてある十八願の心というものからこの悪人正機説を出したとは思いたくないんです。つまり現実はそのお経の中から出された論理だろうと思いますが、ぼく自身はやはり苦しい親鸞の生きざまの中から考えて、この悪人を社会的弱者といったんですが、社会的弱者、弱い立場の人のところにきちんと、光を当てて行こうではないかと、そういうのが宗祖の思いの中にあったんじゃあないんだらうかと思う。

そうすると、社会の中で、底辺でうごめく差別や偏見で苦しみ悩んでおられる人たちにこそ光をあて、そういうことに目覚めていかなければならないのだと悪人正機において感じとっていかなければならん問題だと思う。

#### (仏教者へ望むもの)

そのことを仏教を専門としておられるみなさま方、あるいは宗教者の方にぜひともこれをお願いしたいと思う。解放運動なんか全く意に介せずというような態度のお坊さんもいらっしゃるが、そういう人は一番に浄土真宗の看板をおろしてもらわなきゃあいかん、と思っっている。

最初は悪人正機ということを、他人にしゃべるときに

自分が悪人だとしっかりと感じていることをこそ目当てとされているんだ、というふうなことを話したことがありました。そういう受けとめ方をしていた時代もあった。しかし、いま解放運動をしている身として、そういったところで人権を疎害されている、その人たちを救う運動、そのことがまさに悪人正機ではないんかなというように捕え直しているところです。このことをぜひ仏教を専門にする方に明らかにしてもらい、実践してほしいとお願ひしたいのです。